

## 科学データシステムのためのアプリケーションレイヤ:「デジタル台風」と「2011年東日本大震災」のケーススタディ Application Layer in Science Data Systems: Case Study of "Digital Typhoon" and "2011 Great Tohoku Earthquake"

北本 朝展<sup>1\*</sup>

KITAMOTO, Asanobu<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 国立情報学研究所, <sup>2</sup> 科学技術振興機構

<sup>1</sup>National Institute of Informatics, <sup>2</sup>JST

本稿は「アプリケーションレイヤ」というキーワードで、科学データシステムがより有効に活用されるため方法論について議論したい。データそのものは通常は数字の集まりでしかなく、その数字をどう読んで、どう処理して、どう解釈すればいいかという文脈を共有する人々にしか使えない。このような文脈の問題は、一般の人々だけの問題ではなく、他の研究領域の研究者にとっても重要性が高い。よりアクセスしやすく使いやすい科学データシステムは、データを読み、処理し、解釈するための文脈を提供するアプリケーションレイヤをうまく設計すべきであると考えます。そこで我々の二つのプロジェクト「デジタル台風」と「2011年東日本大震災」を紹介し、アプリケーションレイヤをどのように設計できるかを、情報アーキテクチャ、データ統合、情報可視化、ソーシャルメディア等の観点から議論する。

キーワード: 科学データシステム, アプリケーションレイヤ, 情報アーキテクチャ, データ統合, 情報可視化, ソーシャルメディア

Keywords: science data system, application layer, information architecture, data integration, information visualization, social media